

材は、そこに自生していたものではなく、外から持ち込まれたものかもしれない。戦場ヶ原は現在、栃木県日光市の日光国立公園内の特別保護地区に指定されているため、容易に調査することはできないが、局所的に生息している種とは考えられないので、日光周辺へ行かれる際は、上記の情報に注意をしながら調査をしていただきたい。

引用文献

- Cate, P.C., 2007. Family Elateridae Leach, 1815 (-Cebrioninae, Lissominae, Subprotelaterinae). In: Löbl, I., & A. Smetana (eds.), Catalogue of Palaearctic Coleoptera, 4: 94–207. Apollo Books, Stenstrup.
- 稲泉三丸, 2003. コメツキムシ科 Elateridae. 栃木県自然環境調査研究会昆虫部編, 栃木県自然環境基礎調査 とちぎの

- 昆虫 II. pp. 177–206. 栃木県.
- 環境庁, 1995. 日本産野生生物目録 一本邦産野生動植物の種の現状-(無脊椎動物 II). 620 pp. 自然環境研究センター.
- Kishii, T., 1987. A taxonomic study of the Japanese Elateridae (Coleoptera), with the key to the subfamilies, tribes and genera. 262 pp, 12 pls. 自費出版.
- Kishii, T., 1999. A check-list of the family Elateridae from Japan (Coleoptera). Bulletin of the Heian High School, Kyoto, (42): 1–144.
- Suzuki, W., 1985. On some Elateridae of the Far East (Coleoptera). Transactions of the Shikoku Entomological Society, 17(1/2): 79–89.
- 鈴木 互, 1989. コメツキムシ科. 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター・共同編集. 日本産昆虫総目録 I. pp. 327–345. 九州大学農学部昆虫学研究室, 福岡.

(2016年9月16日受領, 2016年12月13日受理)



Catalogue of Formosan Tenebrionidae (Insecta: Coleoptera) [台湾産ゴミムシダマシ目録]

Kiyoshi Ando, Ottó Merkl, Ming-Luen Jeng, Mei-Ling Chan & Yasuhiko Hayashi
Japanese Journal of Systematic Entomology,
Supplementary Series (1), 112 pp.
2016年3月3日発行

アジアのゴミムシダマシ科はまだ研究が進んでおらず、東南アジアはもちろん、日本からもいまだに大型種の新種が発表されている状況である。大図鑑も出版され、日本はようやくひと段落したようだが、台湾からはまだまだ新種が発見されるであろう。しかし、新種の発見と一口に言っても、いちばん難しいのは既知種の把握である。それにはまず正確な分類学的目録が必要である。

今回、安藤清志博士を筆頭著者として台湾産のゴミムシダマシ目録が出版された。2015年末までに出版された450種が網羅されており、最新の分類体系のもと、各種のシノニムリストと分布が示されている。特筆すべきは多数の種のタイプ標本の写真が図示されてい

ることである。この点で本書は単なる目録ではなく、図鑑の意味合いも持つ、より利用価値の高いものとなっている。

安藤博士は世界を代表するゴミムシダマシ科甲虫の権威であり、アジア産種に関する精緻な論文を継続的に出版されている。本書を見て感じたことは、「親切」と「気前がいい」である。分類学者のなかには、苦勞して集めたタイプ標本の写真を自身が抱え、自身の研究のみに使用する人が少なくない。しかし本書を見て、世界的な研究はそのようなケチケチしたものであってはならないということを教えられた。生物多様性解明を目的とした大きな国際貢献である。

現在、台湾にはゴミムシダマシを専門として精力的に研究している人はいなさそうだが、本書によって始めようという人も現れるだろうし、研究者ならずとも同定の手掛かりとして利用する人は多いだろう。本書は安藤博士が世界的研究者としての矜持を体現したものであるとともに(ご本人はそんなことは思っていないかもしれないが、見習うべきである)、未来のゴミムシダマシ研究者への応援歌ともいえるだろう。

(丸山宗利)

